



TITLE:

<紹介> 牟發松主編 『社會與國家關係視野下漢唐歷史變遷』

AUTHOR(S):

川本, 芳昭

CITATION:

川本, 芳昭. <紹介> 牟發松主編 『社會與國家關係視野下漢唐歷史變遷』 .
東洋史研究 2007, 66(2): 314-318

ISSUE DATE:

2007-09

URL:

<https://doi.org/10.14989/138216>

RIGHT:

紹介

牟發松主編

『社會與國家關係視野下 漢唐歷史變遷』

川 本 芳 昭

中國においては近年の活発な研究状況を反映して、出版物の数が極めて多数に上っている。中國の古代史、中世史を専攻して

きた筆者にとって、今から四十年近い昔に研究を始めた當初、中國書と言えば陳寅恪や唐長孺、周一良などの各氏の著作が論文執筆の際、主に必要であったのと比べると隔世の感がある。もちろんこれは菲才の筆者にとつてのみ當てはまることであるが、しかし、近年の中國における數多の研究成果の刊行を前にして、その十分な消化がなかなか容易ではないと感じているのは筆者のみではないのではあるまいか。またこうした状況は日本における一研究者が、中國における研究の全體状況を把握することをも困難にしつつあるように思われる。その

ため、それを補うために中國史研究動態など學會動向を紹介したものによることになるが、その場合、評者の問題意識と讀者の問題意識などが噛み合わないことが多いため、隔靴搔痒の感にとらわれることも多い。

ここに紹介する牟發松編『社會與國家關係視野下の漢唐歷史變遷』（華東師範大學出版社、二〇〇六年）はそうしたなかにあつて現今の中國における古代史、中世史研究の現状を簡便な形で、しかも俯瞰的かつ高度なレヴェルまで把握させてくれる得難い書籍である。

本書は二〇〇四年の秋に華東師範大學で開催された國際シンポジウムの成果を一書にまとめたものであり、その目次は以下のものである。

傳統中國的「社會」在哪里

——代前言——

牟發松

試從社會與國家的關係看漢唐之間的歷史變遷
谷川道雄

從社會與國家的關係看唐代的南朝化傾向
牟發松

關於日本近代歷史學的形成

——唐宋變革論成立的背景——
荻森健介

關於隋及唐初三省制的「南朝化」問題

——以三省首長的職權和地位爲中心——

王 素

漢唐「家法」觀念的演變

張國剛

漢唐社會宗教體制的變遷

鍾國發

從張家山漢簡與唐律的比較看漢唐奴婢的異同

李天石

漢唐節日形態的演變

夏日新

戰國秦漢時期的里社與私社

楊 華

西漢時期咸陽原地區地方社會的空間像

——据文物地圖資料和衛星照片的統計和分析——

陳 力

從衝突到兼容

——中國中古時期傳統社區與佛教的關係——

郝春文

東晉時期揚州的流民問題及其歷史意義

中村圭爾

關於南朝鄉村研究的幾個問題

章義和・張劍容

朝廷、州縣與村里——北朝村民的生活世界

侯旭東

北齊標異鄉義慈惠石柱所見的鄉義與國家的關係

佐川英治

在南北朝國境地域的同姓集團的劫向和其歷史意義

北村一仁

魏晉時代言及九品中正制度的論述特征

北魏中正職權考略 張旭華

論秦漢異同與士大夫的社會平衡机制 馬彪

南京象山東晉王氏家族墓志研究 張學鋒

顧雍論 張學鋒

——從一個側面看江東大族與孫吳君權之關係 王永平

戰國秦漢之際的小農與國家關係初探 于凱

從走馬樓吳簡蠡測孫吳初期臨湘侯國的疾病人口問題 高凱

從王官繼承現象看西周王權與貴族家族的關係 黃愛梅

唐代諫官小考 胡寶華

——以諫議大夫為中心 東晉次

後漢帝國的衰亡及人們的「心性」 李磊

在朝在野兩種玄學交互作用下的晉代士風 莊輝明・陳迪宇

東吳政權中后期會稽地區民間謠言的傳播示意及控制 武鋒

神仙觀念與東漢宗教思想 東晉至宋佛教戒律的發展與特點

原理、思辯與勢 嚴耀中

——「隋唐帝國形成史論」讀后 趙昌平

「隋唐帝國形成史論」的視野・相互聯系中的民衆與國家 李文瀾

「社會與國家關係視野下的漢唐歷史變遷國際學術檢討會研村會」綜述 劉雅君

本書的全體的な狙いは、冒頭の牟發松「傳統中國的「社會」在哪里——代前言——」や谷川道雄「試從社會與國家的關係看漢唐之間的歷史變遷」に端的に示されている。牟論は、廣く中國史全體における社會と國家に關わる研究を費孝通、錢穆、陳寅恪などの研究を回顧しながら、一部で國家はあるが社會はなかつた、あるいは社會は國家に包み込まれていたと言われたこと

もある漢唐間の時代における社會の問題を取り上げることの中國史研究上の重要性、今日の意義を指摘する。谷川の論は後漢から魏晉の時代に、これまでとは相違した、「人格」が大きな役割を果たす新たな人間關係が出現したことを重視し、從來の氏の主張を總括する。

家はあるが社會はなかつた、あるいは社會は國家に包み込まれていたと言われたこと

もある漢唐間の時代における社會の問題を取り上げることの中國史研究上の重要性、今日の意義を指摘する。谷川の論は後漢から魏晉の時代に、これまでとは相違した、「人格」が大きな役割を果たす新たな人間關係が出現したことを重視し、從來の氏の主張を總括する。

家はあるが社會はなかつた、あるいは社會は國家に包み込まれていたと言われたこと

もある漢唐間の時代における社會の問題を取り上げることの中國史研究上の重要性、今日の意義を指摘する。谷川の論は後漢から魏晉の時代に、これまでとは相違した、「人格」が大きな役割を果たす新たな人間關係が出現したことを重視し、從來の氏の主張を總括する。

家はあるが社會はなかつた、あるいは社會は國家に包み込まれていたと言われたこと

もある漢唐間の時代における社會の問題を取り上げることの中國史研究上の重要性、今日の意義を指摘する。谷川の論は後漢から魏晉の時代に、これまでとは相違した、「人格」が大きな役割を果たす新たな人間關係が出現したことを重視し、從來の氏の主張を總括する。

家はあるが社會はなかつた、あるいは社會は國家に包み込まれていたと言われたこと

もある漢唐間の時代における社會の問題を取り上げることの中國史研究上の重要性、今日の意義を指摘する。谷川の論は後漢から魏晉の時代に、これまでとは相違した、「人格」が大きな役割を果たす新たな人間關係が出現したことを重視し、從來の氏の主張を總括する。

本書の基本的性格はこの兩氏の論に明確に示されているが、筆者にとって本書の有益性はむしろ各研究者の個別論文にあった。そのいくつかをここに紹介してみよう。

楊華「戰國秦漢時期的里社與私社」は各種新出の簡牘によりながら、戰國時代の諸國家がその中央集權化の過程でそれまでの血緣關係を紐帶として結びついた里社合一の體制を破碎し、國家の支配の及ぶ地緣關係の基づく里社へと改變したこと、秦漢帝國はそれまで鄉飲酒などのような禮に依存していた里社を法に基づくものとし國家による規制を格段に強めたこと、しかし一方で地緣關係を本に、國家の規制の外に新たに所謂私社の形成が見られるようになる、と述べる。

郝春文「從衝突到兼容——中國中古時期傳統社邑與佛教的關係」は中國における佛教の受容、定着の過程において、當初、殺生とその禁止をめぐるそれまでの中國文化のあり方と佛教とが對立、抗爭を繰り返したが、その後それが相互の容認と融合に至ること、晉から南北朝の時代における佛教文化の中國傳統の社邑に對する影響は、それほど大きなものではなかつたが、寺院

や僧侶が傳統文化を容認するようになる、外來の觀念や作法は中國在來のそれと融合していったとし、それを碑文などの一次史料や統計的手法を駆使しながら説得的に論じる。

侯旭東「朝廷、州縣與村里…北朝村民的生活世界」は、北朝村民の生活空間が如何なるものであり、そこに「村里」と呼べる空間が存在し、にもかかわらず「村里」は決して閉じた空間ではなく、それは朝廷、國家と様々な形で結びついていたことを官爵の賜與などの事例を通して詳細に跡づける。

高凱「從走馬樓吳簡蠡測孫吳初期臨湘侯國的疾病人口問題」は、從來全く顧みられることのなかった視角から走馬樓吳簡についての考察を加えたものである。氏は走馬樓吳簡に多出する罹病名を大きく三種に分かれるものと整理する。即ち、①資料中に腹心病、雀兩足などの表現で現れる、寄生虫によっておこる住血吸虫病…②苦風病、盲兩目などの表現で現れるハンセン氏病…③①②以外の聾兩耳、確病、苦狂病などの表現で現れる病（リユーマチ、心疾患、及び住血吸虫病が腦に轉移したものなど）

がそれである。また、氏は①の過半が男性であり、成人女性に一例もその例がないことから、それは男性が農耕・牧畜に従事することが多かったことをあらわしていること、成人男子の高い罹患率は彼等が若年より罹患していたことと關係があり、中國古代における兒童死亡率の高さは、男子死亡率の高さによること、住血吸虫病の罹患に關しては、その分布が現今の中國におけるその分布と重なることなど、興味深い指摘をしている。

他にも興味深い報告が多數收載されているがその紹介は紙幅の都合で別の機會に譲りたい。ただし、本書に掲載されている牟發松「從社會與國家的關係看唐代的南朝化傾向」、王素「關於隋及唐初三省制制『南朝化』問題——以三省首長的職權和地位爲中心」に對して、とりわけ前者を紹介しないことは、紹介としての體をなしていないとの批判を浴びることになる。何故なら、同論は唐長孺氏が唱えた所謂「南朝化」に關わる論考であるが、この問題は本書『社會與國家關係視野下的漢唐歷史變遷』が取り上げる「漢唐歷史變遷」の理解において、多くの研究者が注目する關鍵であり、且つ、

本書、及びそのもととなったシンポジウムもまた、唐長孺氏の歷史理解と密接に關連して開催されたと考えられるからである。牟論は、所謂「南朝化」について、それ

には類型と段階が存在することを指摘し、「南朝化」を「國家主導型」、「非國家主導型」、「總合型」（「南朝化」現象の大部分を占める社會發展・變容の結果を受けて國家がそれを承認・變容した形態）に分類し、北魏孝文帝による改革の場合を「國家主導型」の「南朝化」、北朝隋唐間における文學の展開に見える「非國家主導型」の「南朝化」、唐代中葉における「總合型」としての「南朝化」などについて具體的に述べる。また、氏のこれまでの「南朝化」についての研究を踏まえつつ、隋唐による統一によって南朝故地においては「北朝化」が生じたが、唐代中葉の「南朝化」は經濟・社會の全面的發展、變容にともない、いわばそれを止揚して出現した總合的なものであること、その意味でこの「總合型」としての「南朝化」は「南朝化傾向」とも呼ぶべきであり、この點では孝文帝の改革や隋唐初における「南朝化」とは相違すること、漢末から趙宋初期に至る歷史發展を見ると

き、北朝隋唐期、とりわけ唐中葉における「南朝化傾向」は各種社會動因が衝突、融合を繰り返し生み出されたものであり、國家の體制となったものであることなどを指摘する。

王素「關於隋及唐初三省制の“南朝化”問題——以三省首長的職權和地位爲中心」は陳寅恪氏の隋唐官制は北魏・北齊のそれを受けたものであり、梁陳を受けたものではないとする見方に修正をせまり、隋及び唐初三省長官の制度、ひいては三省制全般が梁陳のそのの影響を受けていることを指摘し、そこに「南朝化」の存在を指摘する。

さて、杉山正明氏はその諸説において、中央ユーラシア史という観点から、中國史を相對化し、「世界史」を創造したものであるとして中央ユーラシアの役割を強調している。同氏の論の中心はモンゴル史や、それに先立つウィグル、チュルク、キタイ諸族の活動にあるが、本紹介が取り扱う時代と關連する氏の發言もある。たとえば、「北魏から唐までは、一連の國家であり、現實には「拓跋國家」というのがふさわしい。視野の狭い意味での中國史や草原史に限る

ことなく、ユーラシア・サイズで眺めると、草原・農耕兩世界をひつくるめた大變動のはてに、西陲のヨーロッパではゲルマン系諸國家が形成され、東方の中華方面にあつては鮮卑拓跋系の政治連合體が政權を交代して、かつての匈奴でも漢でもない新しいタイプの融合國家を作り上げた。隋唐という中華大帝國はその完成體なのである。」(同氏「岩波世界歴史一 中央ユーラシアの融合」四二頁)などに氏の考えが表明されているが、こうした觀點と、先述の牟發松氏の考えに見られる「南朝化」の觀點とはどのように接合するのであろうか。

大局的にはそれは内藤湖南の中國の外部發展が暫時停滯した後漢中頃から西晉時代(第一過渡期)、外部種族の自覺によりその勢力が反動的に中國の内部に及んだ時代である五胡十六國より唐の中頃までの時代(第二期)、外部から來た勢力が中國において頂點に達する唐末から五代の時代(第二過渡期)、近世前期たる宋元の時代(第三期)とする見方、及び同じく同氏の中國社會の内部發展を政治體制からとらえた周知の、唐代までを貴族政治の時代、宋代以降を君主獨裁政治の時代とする所説との接

合如何と云うことになるであろう。

牟發松氏らの編纂にかかる同書を読みながらこのような巨大な問題に立ち至った。本小文が取り扱う問題ではない。ただ内藤において本來相互に關連するものとしてとらえられてきたこの二つの見方が、近年の諸研究においては各々別個の立場から切り離されて論じられてきている感を筆者は強くするものである。本書の視角もまたその意味では上述の二つの見方を總合的にとらえようとしたものではない。前掲の谷川氏の論の中に本書が取り扱う時期における中國と外部種族との關係に注目する記述が見られる(二頁)。しかし、本書全體としてそのような視角は考慮外のこととされているようである。本書の主題があるいはそのような方向性を生んだのかも知れないが、しかし、そこに杉山氏などが指摘することがらを外在的な問題ととらえる指向を見るのはうがちすぎであらうか。そもそもこうした問題は文明規模で展開する中國の歴史を取り上げるとき、切り離して考えることはできないのではあるまいか。

本書の各論考に關わるものには、侯旭東『北朝村民的生活社會——朝廷、州縣與村

里』（商務印書館、二〇〇五年）、郝春文『中古時期社邑研究』（新文豐出版公司、二〇〇六年）などシンポジウム後に書籍化されたものもある。また、本書に収めら

れている諸論考の内容は劉雅君氏の論考に簡潔に紹介されており、同シンポジウムのスケジュールなどを含めた紹介が既に佐川英治氏によってなされている（唐代史研

究會編『唐代史研究』八號、二〇〇五年）ことを附記する。

二〇〇六年一月 華東師範大學出版社
A五版・五二三頁